

# 北陸地方における

## 飼料の自給について

石川県畜産課 林 正 浩

北陸地方の酪農は、耕地の八〇%を占める水田の上に展開し、従つて飼料の自給も米作部門よりの「稻ワラ」を主幹として發展、土地条件の整備に伴ない、水田裏作による飼料作物の栽培、田畠輪換による牧草の栽培と推移し、酪農の位置も副業的酪農より、米作部門と結びついた併立酪農へと、その酪農の経営形態は変りつつある。

石川県金沢市二塚地区におけるラデノクロバーとイタリアンライグラスの混播（田畠輪換地）

**a 水田裏作の発展**  
昭和二十六年度よりの積寒・土地改良事業等の施行に伴ない、土地条件の整備と共に、裏作可能面積の拡大が行なわれ、飼料作物の裏作が發展して來た。  
**b 水田裏作の発展**  
しかし水田裏作の飼料作物として

1 水稲栽培に支障のない作物  
2 越年性又は一年性の作物  
3 耐寒性及び耐湿性に強い作物  
4 栽培管理労力の比較的少なく、容易に栽培でき得る作物  
5 収穫量多く、經濟的に生産できる作物

糧自給の達成による食糧生産過剰の声さえ聞かれる様になつたので、副業的酪農は漸次、米作併立酪農へと真剣に考えらるようになつた。

「ワラ酪農」と呼ばれる濃厚飼料と「稻ワラ」の飼料給与に依る不安定な経営形態であつたが、化学肥料、農薬による掠奪一途を辿り、秋落ち現象が全水田面積の七〇~八〇%を示すに至り、その上、食

糧自給の達成による食糧生産過剰の声さえ聞かれる様になつたので、副業的酪農は漸次、米作併立酪農へと真剣に考えらるようになつた。

**c 野草地の減少**

水田裏作の飼料作物栽培は、順次発展して來たが、水稻作主幹の農業構造は依然崩れず、そのため各作中心の飼料作物の限定された狭い期間以多は、完全燃焼させるための副業的酪農形態を示し、その内容は、低生産性のまま存在し、「ワラ酪農」と呼ばれる濃厚飼料と「稻ワラ」の飼料給与に依る不安定な経営形態であつたが、化学肥料、農薬による掠奪一途を辿り、秋落ち現象が全水田面積の七〇~八〇%を示すに至り、その上、食

糧自給の達成による食糧生産過剰の声さえ聞かれる様になつたので、副業的酪農は漸次、米作併立酪農へと真剣に考えらるようになつた。

**d 田畠輪換の展開**

牧草が水稻と有機的に結び付いた水稻自給の達成による食糧生産過剰の声さえ聞かれる様になつたので、副業的酪農は漸次、米作併立酪農へと真剣に考えらるようになつた。

田畠輪換の展開

田畠輪換の展開により、酪農民は緑芻飼料の獲保に新しい打開策を見出すべく追いつめられた。

2 越年性又は一年性の作物  
3 耐寒性及び耐湿性に強い作物  
4 栽培管理労力の比較的少なく、容易に栽培でき得る作物  
5 収穫量多く、經濟的に生産できる作物

の諸条件を具備する作物は殆どなく、レンゲ、青刈、エンバク、青刈大麦、蕪菁等とい種類に限定されて來た。

當の大規模化、労働力の合理的配分化を図り、そのうえ、水稻の収量増大を成し遂げた。田畠輪換地における牧草の種類は、ラデノクロバーを中心、オーチャードグラス及びイタリアンライグラス、ペレニアルライグラスで、単播、混播の方法で実施されているが、その一例を示せば、



石川県における水田裏作物作付面積推移（昭26=100）

年次 種類	昭26年	27	28	29	30	31	32	33
大麦	2,248 (100)	1,620 (72)	1,540 (69)	1,510 (67)	1,370 (61)	1,090 (48)	645 (29)	533 (24)
ナタネ	390 (100)	600 (154)	670 (172)	190 (49)	330 (85)	400 (103)	329 (84)	249 (64)
馬レイ薯	—	80 (100)	64 (80)	120 (150)	95 (119)	70 (88)	71 (89)	65 (91)
レンゲ	12,320 (100)	12,610 (102)	12,080 (98)	12,250 (99)	12,150 (99)	11,056 (90)	10,360 (84)	9,791 (79)
青刈飼料	—	668 (100)	992 (150)	1,001 (151)	1,069 (160)	1,389 (209)	1,486 (224)	2,213 (331)
結球白菜	—	8 (100)	—	38 (475)	—	149 (1,863)	—	149 (1,863)

（石川統調）

## e イタリアンライグラスの栽培拡大

田畠輪換地のラディノクロバー栽培により、豆科牧草の把握に成功した酪農民は、家畜の栄養生理より禾本科牧草の把握を迫られた。田畠輪換地におけるラディノクロバーとイタリアンライグラスの混播により、春期における本草の草生状況を観察した酪農民は、裏作に先んじてイタリアンライグラスを取り入れ、早場米地帯である石川県においては八月下旬に播種し、年内二回、翌年二月三回の刈り取りを実施し、一〇kg当たり一五kgの収量を示している。

## 2 北陸地方に於ける飼料

### a 自給上の問題点

ラディノクロバーの栽培を中心とした北陸地方の酪農形態は、蛋白質の給与過剰の傾向が現われて来た。とくに禾本科牧草の

(1) 栽培者	石川県鹿島郡原久	
面 積	15ha	
播種期	昭和30年10月2日	
播種量	2.25kg (ラディノクロバー)	
施肥量 (10kg当たり)	33年 34年	
追肥	厩肥 3,700kg 消石灰 187.5kg 溶磷 75kg 塩加 75kg 過石 375kg 牛尿 3,000kg 尿素 45kg	4,500kg 200kg 60kg 75kg 375kg 3,000kg

#### 刈取期及び収量

年次	刈始	刈終	10kg当収量
昭和31年	4月29日	11月18日	17,250kg
昭和32年	4月14日	12月4日	21,750kg
昭和33年	4月18日	11月25日	19,125kg
昭和34年	4月13日	12月10日	16,200kg

#### (2) 栽培者 同じ

面 積	10ha
播種期	昭和31年9月25日
牧草種類	ラディノクロバー
施肥量	

#### 昭和33年12月上旬

厩肥	4,500kg
溶磷	60kg
石灰	100kg

#### 昭和34年3月20日

塩加	37kg
昭和34年5月25日～6月4日	
過石	37kg

#### 他に刈り都度 牛尿追肥

刈取回数	刈取期間	収量
1	昭和34年4月13日～4月23日	3,265kg
2	昭和34年5月2日～5月13日	3,670kg
3	昭和34年5月25日～6月4日	3,820kg
4	昭和34年6月18日～6月30日	3,110kg
5	昭和34年7月15日～7月28日	2,200kg
6	昭和34年8月15日～8月29日	1,980kg
7	昭和34年9月28日～10月16日	2,320kg
8	昭和34年11月1日～11月28日	1,640kg
計		22,025kg

#### 刈取期間

#### c 禾本科永年牧草の選定

田畠輪換により、酪農の発展基盤を確立した北陸の酪農民は、労働力の合理的な配分の面より、及び気象条件より、春期刈

#### d 田畠輪換地に於ける青刈玉蜀黍と大豆との栽培

(石川県石川郡松任町)

#### b 馬レイ薯、甘藷の栽培

問題点を示している、その点より、生産性の高い澱粉質飼料の確保が急務であり、馬鈴薯、甘藷の栽培拡大が適当ではないだろうか。

不足する秋冬期におけるセルローズ不足は、家畜の栄養生理上、種々の弊害を起こしているので、水田地帯の特産物としての「稻ワラ」のセルローズ利用を再検討されるべきであろう。



## 3 むすび

北陸地方の飼料の自給状況は、「稻ワラ」として発展して行くが、田畠輪換の牧草の栽培が、反当たり収量を多くすることが目的のすべてではなく、米作部門と併立し、農業生産性の高度化へと導く画期的方法として、所有耕地の計画的区分化を図り、水稻と牧草の輪作を実施すべきであろう。

北陸地方の飼料の自給状況は、「稻ワラ」より始まり、田畠輪換による牧草導入に変遷して来たが、副業的酪農の存在価値を認められない時代的推移に応じ、米作併立の方針として当然な形態であろう。今こそブリックマンの経営原則を認識し、新しい水田地帯の酪農経営方式の確立に、緻密なる計画性と大いな勇気を持つて努力されるべきであろう。